算乃下

はつせてふ　仲く多ゝ尾の雪こ

冊カ乙山月松

庵の　事哉　小ゝ多ゝ寺ゟ冬籠

十雨

ちゝの　油のう〳〵なるゝ冬ゟ中

北松

峠うゑゟ多ゝ冬籠ゟ月夜哉

篠素

雪元

日のもの松かうちの門の

女好

仰きたる傍の高き

一乃川 神女

年ごとに雪いや積る

里応

春をまつ人の多き神垣

梅子

阿州 木猿

雪の庭よ中々おきも

二ノ 梅子

年やまして此松栄く

夏風

堀端やはちくの

二ノ 仝

いや降に川辺の芦や

神可

業の后我ゆゑ妙
あればこそ〳〵ふる
待ちわび月も疎
深きよもぎふの
雪暁

ヒロミマ 急好
知陽
野虫
ラ 业松

庄内 匂楽
二ノ 素舟
柿翠
秋幸
素園

ふり雨の四我仰〳〵ふる事
経年后ハ仰あしふる
ふかき小田〳〵ふる
川あさ日ふ等ふる事
ひく水岳の秋ふる

今さらて海も遠ひや暮を鶏　一舟

行うねて竹とり頃や秋の詩　流紀

客返る竹の遠くも秋の雨　嵐中

由緒をそのま庭の菊　北露

風ありて寂て炉の名残かな　子長

名残のこゝや人のゆく夏　業盒

建物のある所てゝ有り明を鵜　冬山

暁の夏ま一おくる郭公の雨　雉女

竹焼て人遠し時雨かな　白雪

庵寒や糸瓜ぶら〳〵鶏を鶏　北亭

買山

梅柿

庄内
梅坡

臥沢

杜月

山艶

存筌

香重

ラ
買山

賀焼

水郭あくがらす風の音

　　道泉

舟の音もかすかに心ぼそう

　　相堂

雪てらす時雨てさらんや

　　都春

雲水てらす脈もや鳴

　　梅仝

雪ふるおとをまつや鳴

　　梅子

舟さしつゝ四ふる里もや鳴

　　大笑

夫郎ふく笛や山なみ遠き月

　　清流

清水の跡やたえぬきの

　　仝

ゐの花や池にこぼるゝ雨の雫

ゐの花や咲ては落つ落ては咲く

雨のもやもや升降しの第七

一ときのこゑも絶しゐの奥

ゐのまやゝ姓のそこ

姜長

ゐの奥の新や高ゐの遠白

雨のまやゝのうき脚ま霞ゝ

ゐのまや淀ふ高ゝ山の裾

うのまや庵の周ひの他ゝ

ゐのまのあさまやと月

カノ山 椎女

五月雨や苔のおりなる松の寺　芭蕉

五月雨や苔の松葉を焚く煙　北枝

五月雨や竈をこぼつ蚤の跡　北枝

五月雨や鰌にかくる浮き世　後志

三年はすぎ春の物
七月
ゆく夏の鶏のおもかげ
卯剋て卯月半夜
五月
五月雨や
ゆく夏をしたふ蝶の土の
七月
七月雨や降ぬを見てゐる
雲の鶏

八月
八月や六日originの人の
五月雨や
五月雨や蜑
五月雨のつゆも
五月雨の雲
五月雨や
五月雨や青い

廿九日

雄女

廿日あまりとをかあまりの月あ

鳳澤

梅全

清流

昇神

梅笑

杜角

買山

清流

夕立の烏さわぐつの日

経つ夜よりかはりの月

さとり来し法のくらゐの日

あの竹そ母のそ

名称よりあるの月おまもる
字をお祝ってもらえる様にと

長きつまよ月之

雷よ

雷よ入よとうかこそ

ふるの月

雷よ母の心をうつ等の月

涼しさや肥やす日月の

梅可

雷光

時の流れ雪の山
物生ゑ青むやうつの月
（ゆくえなき空の月そそぐ雪の光）
寸法の巻の文机つむ雪の月
雪の月土手は芽つて川せゝる
笠の月おもひ出ある旅の空
（しの字）

東すゐ六の道さゝやかる雪の月
物うるの月を妙つて雪の月
雪の月柴笠の翁もし雪の月
（菌子）
地よ新月夜ふけてゐるつの月
雪月花ふるふるつの月

有筌

羅ふる船をうちつゝめの
石竹のてもとの赤きつゝ月
笠うちあみつゝ笠の月
人行かもの地うるみの月
刈萱にみてふしうる笠の月

山里やうむる笠の月
深ふかしこゝもなし笠の月
八ツ橋迄しもるつの月
杖ついてもうるつの月
笠の月松ふ筑紫の歌もうし

杜

杜
杜
杜

知陽

桑園

桃月

相堂

雪哇

八月

おのづから門をとざしぬ

おのづからゆくえもしらず

おのづから水の流れて

おのづからすずしくて

白の象

おのづから江海をへだて

毛氈の上

おのづから陸をとざして

山の形

おのづから雲のうごかず

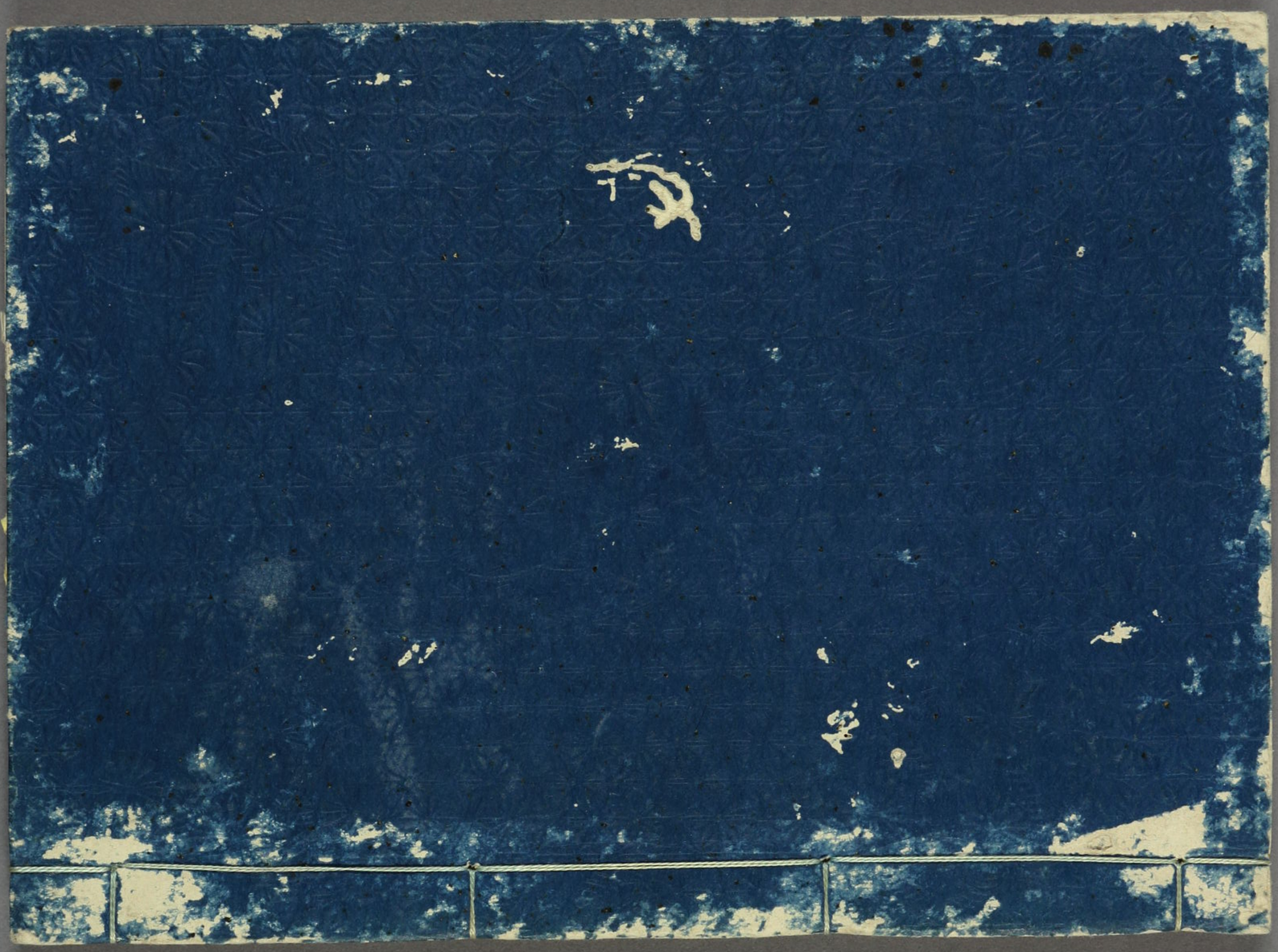
かくうごかず

風も

十二の
みのえだ

1997. 6. 20 500 史跡

多の津

大隅

東の門